いきいき小富士っ子

R６学校便り　No.７

令和６.７.１０

四国中央市立
小富士小学校

農耕社会（Society 2.0）は何処へ向かうのか

つい先日、田植えをしていたと思えば、あっという間に苗の背丈が伸びてきて、田んぼの緑が一段と鮮やかになりました。暑い夏を迎えていますが、稲の葉をそよそよと揺らす風がとても気持ち良く感じます。涼やかな夏の小富士の田園風景は、私たちにとって誇りであり、心の拠り所です。そんな風景をみていると、農業は小富士を支えるものであり、小富士の文化なのだと思います。ところが、先日、衝撃的なニュースを目にしました。基幹的農業従事者（農家の中で、主に農業で生計を立てている個人事業主）が年々減少しており、平成 27 年から令和２年のわずか５年間で、22%も減少していると言うのです。平　成 17 年からだと 61%まで激減しています。将来はどうなるのかを調べてみると、2050 年には、農業従事者が 100 万人減少して 36 万人になる見通しだと書かれていました。農地も減少傾向と予想されています。このままだと、いずれ農業従事者が居なくなるかもしれません。そうなると食料は育てる（栽培・飼育等）ものではなく、狩猟により得るものになります。かつて人類誕生の頃は狩猟社会（Society 1.0）でした。狩猟社会では食料が限られていたので、食料は奪い合うものであり、争いが絶えない社会でした。時代は農耕社会（Society 2.0）へと移行し、農耕社会は、食料の安全保障を強化し、安定供給を実現しました。その後、時代は「工業社会（Society 3.0）」から「情報社会（Society 4.0）」へと進化・発展しました。今、時代は「超スマート社会（Society 5.0）」となっています。しかし、農業従事者が居なくなったら、時代は狩猟社会に戻るのか。それとも食生活が変わり、サプリメントが主食の時代になるのか。そのようなことにならないように、考えておくことが大切ですね。まずは、農業従事者を減少させないための手立てが必要ですが、それがなかなか難題のため、少ない担い手でできる農業（スマート農業）を進めようとしているようです。人手不足を機械でカバーしたり、気象条件に左右されないよう工場で生産したりすることは、すでに取り組まれています。将来は、ロボットを活用することで、もっと自動化や無人化、省力化を図り、ビックデータの分析を通して、食料の生産量や収穫量を最適化し、「スマート農業」を進化させることができるのではないかと考えます。農業を守るためにも、学校で行う食育は重要だろうと思います。食について考えることによって食品ロスが減少できれば、農業従事者への負担を軽減できます。今日も給食の放送で、生産者さんのお名前が紹介されました。生産者さんを身近に感じることで、農業に興味を持つ児童が増えればいいなと思います。

人類社会発展の軌跡

①狩猟社会…自然との共生
②農耕社会…灌漑技術の開発
　　定住化の定着
③工業社会…蒸気機関の発明
　　大量生産
④情報社会…コンピュータの発明
　　情報流通
⑤超スマート社会…ビックデータ AI

ホームページもご覧ください。　https://kofuji-e.esnet.ed.jp/